

## 人間学者としてのカント：近代教育批判を問い直す

塚野，慧星  
九州大学大学院人間環境学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/4475438>

---

出版情報：飛梅論集. 21, pp.17-30, 2021-03-25. Graduate School of Human-Environment Studies,  
Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

# 人間学者としてのカント

— 近代教育批判を問い直す —

塚 野 慧 星\*

## はじめに

教育学では20世紀末より、近代教育の閉鎖的な知に対する反省から、教育理論を多元的な知のなかで再構築する方向が模索されてきた<sup>(1)</sup>。こうした潮流のなか、カント (Immanuel Kant) の教育理論をめぐっては、論者によってその見直しが行われている。なかでも重要であると思われるのは、「人間」と関わる問題に焦点を当てたビースタ (Gert J.J. Biesta) の議論である。

ビースタは『測定時代のよい教育—倫理・政治・民主主義』(2010)において、「教育において主体化は重要であるべきだ」という彼自身の主張を、思想史上の文脈に位置づけようとする場面で、「近代教育の発展の重要な参照点」とされてきたカントに言及する。ビースタによれば、カントは教育の領域に主体化の次元を切り開き、「人間の自由に関する問いを近代教育の中心問題にした」のであった。ところがこのとき、カントの教育理論では、「人間であるとは何を意味するのかについての基準」が「理性使用に基づく自律」に定められ、さらにこの基準が「人間の目的」と見なされていた。ビースタはこの点に着目し、「近代教育の幕開けはそれが始まろうとする手前で閉ざされた」と論じている [Biesta 2010: 75-78]。ビースタはこの議論において、カントが「理性使用に基づく自律」を主張したこと自体を、必ずしも否定的に捉えているわけではない。むしろその要点は、「人間であるとは何を意味するのかについての基準を想定する」というまさにこの形式にある。というのも、教育はこの形式において、被教育者に「何者であるか」や「何者でありうるか」を示すより前に、彼女ら／彼らが「何になるべきか」を明記してしまうからである [Biesta 2010: 79-80]。

ビースタが表明する問題関心は、私たちがまた共有しているところである。教育は「人間であるとは何を意味するのかについての基準」を定めるとき、本来ならば多様であるはずの人間の生き方を、特定の基準によって切り分けることになる。近代教育が無自覚に行ってきたとも言えるこの種の暴力が、カントの教育理論に帰せられる部分は多いだろう<sup>(2)</sup>。本研究ではゆえに、カントを擁護するつもりはないし、ビースタに異議を申し立てるつもりもない。とはいえ、近代教育批判が定着してきている今日、カントに対する理解がその「近代的」な側面に切り詰められているとするなら、本研究では今一度、カントの思想に内在する拡がりを確認してみたいのである。カントはたし

\*九州大学大学院博士後期課程

かにある側面では、「人間であるとは何を意味するのかについての基準」を定めていた人物であったが、他方でまた別の側面では、人間の多様な生き方を探求していた人物でもあった。本研究の目的は、カントが人間学者として披露するこの側面を正当に評価すること、またそれを通して、カントに対する理解を問い直すことにある。それは広い意味において、近代教育批判を問い直すことにも通ずるものである。

本研究ではこの観点から、カントの人間学を検討していく。人間学は最も広い位置づけとして、「人間とは何か」という問いに答えることを目的とする学問であった。カントは「人間学」と題した講義を20余年にわたり継続し、その成果をまとめた『実用的見地における人間学』（1798）を出版するなかで、個別の主題を設ける他の諸学問とは異なり、「人間」を探求の課題に据えていたのである。ただしその位置づけは、論争的な部分を多分に含んでいるため、最初のこの地点で断定的なことを語るのは控えたい。本論ではまず、先行研究に触れながら、私たちが歩むべき方向を示すつもりである。

本論全体の見通しを記しておく。第1章では、カントが人間学の位置づけを不明確にしていたことに起因して、実際に取り組みられたものとは異なる人間学の存在が、カント研究者によって想定されてきたことに目を向けつつ、実際に取り組みられた人間学に考察範囲を絞るといふ、本研究の立場を明確にする。第2章では、人間学の特徴とその内実を検討し、人間がこの学問においてどのように記述されているのかを確認する。第3章では、人間学講義が開講された時期のテキストを参照しながら、カントが人間学に取り組みにあたり重視していた、人間の探求と関わる洞察を明らかにする。

## 1. 本研究の立場

カントはその生涯を通して、多岐にわたる学問に取り組んでいた。カントはなかでも、「私は何を知らるか」・「私は何をなすべきか」・「私は何を望んでもよいか」という3つの問いに答えることを、自らの課題に据えていた。『論理学』（1800）では、「第1の問いには形而上学、第2の問いには道徳、第3の問いには宗教」が「答える」と記されている。さらにそこでは、「第4の問い」として「人間とは何か」という問いが提起され、次のように記されている。「最初の3つの問いは最後の問いと関係するため、これら全ては根本において人間学に算入されうるだろう」[Kant 1923a: 25]。

『論理学』におけるこの規定からは、人間学が重要な位置を占めていたことを窺うことができる。カントは個別の学問領域—形而上学・道徳・宗教—でも人間のあり方を論じていたが、そこでは各々の主題を探求することに専念し、「人間とは何か」という問いに答えることを中心課題に据えてはいなかった。とはいえ、カント自身が述べているように、「最初の3つの問いは最後の問いと関係する」のである限り、他の諸学問で取り組まれた成果は、「人間とは何か」という問いに答える学問であるところの、人間学のなかに結集されなければならない。

ところが、カントが実際に取り組んだ人間学は、彼自身がここで与える規定に沿うものとは異なっていた。『論理学』において示される人間学の位置づけと、実際に取り組まれた人間学の位置づけと

のあいだには、ある種の齟齬が存在するのである。カントが実際に取り組んだ人間学は、他の諸学問で取り組まれた成果を結集する学問であるよりむしろ、「実用的見地」＝「社会において一般的に使用されうる知識」[Kant 1923c: 660]において人間を探求する学問であった。カントはこの点を強調して、自らの取り組んだ人間学を、「実用的人間学 pragmatische Anthropologie」と称していた。

人間学の位置づけと関わる齟齬。カントがこの齟齬をどのように捉えていたのかを、テキストから読み取ることができない。それどころか、カントがこの齟齬に自覚的であったか否かさえ、テキストから読み取ることができない。だからこそ、カント研究では従来、人間学の位置づけには多様な解釈—ともすると憶測—が与えられてきたのである。先行研究のなかには、『論理学』において示される人間学が、カントが取り組もうとした本来の人間学であったと考える立場も存在する。ハイデッガーに代表されるこの解釈では、他の諸学問で取り組まれた成果を結集する人間学こそが、「人間とは何か」という問いに答える人間学であると考えられている[高坂 1964: 63][Heidegger 1965: 186][Hinske 1980: 102][Brandt 1999: 16-17]<sup>(3)</sup>。

カントのテキストに解釈を加えることが、「カントが「述べようと欲した」ものを強調する」[Heidegger 1965: 183] ことを意味するならば、人間学の位置づけをめぐる、私たちは様々な憶測を巡らせることができるだろう。他の諸学問で取り組まれてきた成果を結集する人間学が、カントが取り組もうとした本来の人間学であったと考えることも、ひとつの解釈として成立するに違いない。とはいえ、本研究ではあくまで、テキスト上の事実にとどまることにしたい。カントはたとえ「実用的」ではない人間学を構想していたとしても、最後までそれを実行に移すことはなかった。カントが実際に取り組んだのは、「人間学」と題した講義とその成果をまとめた著作において示される、実用的人間学だったのである。

本研究ではこの点を考慮に入れ、カントが実際に取り組んだ人間学に、考察範囲を絞ることにする。ただしこのことは、決して消極的な意味ではない。というのも、カントが「実用的」である人間学に拘り続けたという事実には、人間の探求と関わる重要な洞察が含まれていると思われるからである。

## 2. 人間学に固有の記述方法

カントが取り組んだ人間学とは、どのような学問であったのか。本章では、人間がこの学問においてどのように記述されているのかを、『実用的見地における人間学』（1798）の内容に即して確認する。とりわけここでは、『純粹理性批判』（1781, 1787）との対比を念頭に置いて、人間学に固有の記述方法に焦点を当てることになる。それは何より、人間学が「実用的見地」＝「社会において一般的に使用されうる知識」[Kant 1923c: ibid.]に立脚していることを、テキストに即して確認するための作業である。

カントは『実用的見地における人間学』の序文で、自らの取り組む人間学を、「体系的 systematisch」[Kant 1917: 120]と特徴づけている。同書は「人間学的な教訓論」・「人間学的な性格論」という両

部門のもと、「認識能力」・「快と不快の感情」・「欲求能力」・「個人の性格」・「国民の性格」・「人種の性格」・「人類の性格」を主題とする構成において、人間の諸側面をまさに体系的に配置している。人間学で設けられるこれらの主題は、他の諸学問と密接な関わりを持っている。「認識能力」・「快と不快の感情」・「欲求能力」は、三批判書において焦点化された能力に対応しているし、「個人の性格」・「国民の性格」・「人種の性格」・「人類の性格」は、『美と崇高の感情に関する考察』（1764）、「さまざまな人種について」（1775）、「世界市民的見地における普遍史の理念」（1784）といった、様々な著作で取り組まれた内容を反映している。

私たちはここから、カントが人間学（＝実際に取り組んだ人間学）において、他の諸学問で取り組まれた成果を結集しようとしていたのではないかと期待してみたい。ところが、人間学はこうした期待に応えようとはしていない。人間学はたしかに、他の諸学問で取り組まれた成果を前提とし、自らの体系に組み込んでいる。これらの成果はしかし、「大衆的 populär」[Kant 1917: 120] という原理のもとで再編成され、元来のものとは異なる形式に変換されているのである。大衆的とはこの場合、人間の記述方法と関わる原理を指している。カントによればそれは、人間のあり方を「各読者が見出すことのできる実例と関連づける」[Kant 1917: 120] ということの意味する。

実際にこの学問において、人間がどのように記述されているのかを、ひとつの例に即して確認してみよう。同書では「エゴイズム Egoismus」が問題となる場面で、「私」という意識が取り上げられている。『純粹理性批判』においてそれは、「統覚 Apperzeption」という概念のもとで、認識過程における役割に注目されていた。人間は対象を認識するにあたり、対象の表象が「私」という意識に帰属しなければ、「決して考えられないことが私の内で表象されるであろう」ことになる。したがって、人間が対象を正当に認識するためには、「私」が対象の表象を「考える」という作用が伴わなければならない。カントはこのように、認識過程において決定的な役割を担う自己意識として、「私」という意識を論じていた [Kant 1911: 131-132]。

ところが『実用的見地における人間学』では、「私」という意識は、エゴイズムの源泉となる自己意識として論じられることになる。

人間は私を用いて語り始める日から、許されるところならどこでもその愛おしい自己を表立って主張するようになり、エゴイズムが絶え間なく進行する。仮に公然とではないとしても（というのも、そこでは他者のエゴイズムが抵抗するからである）エゴイズムは密かに進行する。なぜなら、見かけ上の謙遜と偽りの謙虚を装うことによってそれだけ確実に、卓越した人物として他者から判断してもらえらるからである [Kant 1917: 127]。

人間はその多くが、「カールは食べたい」・「カールは行きたい」というように、最初は3人称で語るしかできないが、ある年齢段階になると、「私」という1人称で語り始めるようになる。カントによればそれは、「自分自身を感じるだけ」の状態から「自分自身を考える」ことができる状態への移行を画するものである [Kant 1917: 127]。「私」という意識を獲得する過程とも言えるこの移行



が、人間学において注目されるのは、人間がエゴイストとなりうる可能性がそこで開かれるからである。人間はこれ以降、「愛おしい自己」を表立って主張するようになる。あるいはそうでなくとも、表立って主張しないというまさにそのことによって、「卓越した人物」として評価されることを狙うようになる。

カントはさらに続けて、エゴイズムを「論理的 logisch」・「美的 ästhetisch」・「実践的 praktisch」という3つの型に分類している。「論理的なエゴイスト」は「自己の判断を他者の判断の観点から検討することを無用と見なす」ような者である。「美的エゴイスト」は「自分自身の趣味にひたすら満足している」ような者である。「実践的なエゴイスト」は「自分に役立つこと以外のものには利益を認めない」ような者である [Kant 1917: 128-130]。本研究では、カントがこれらに与える考察を深掘りする代わりに、人間のあり方を「各読者が見出すことのできる事例と関連づける」[Kant 1917: ibid.]と言われていたことが、この考察のなかで体现されていることを強調したい。『実用的見地における人間学』もまた『純粹理性批判』と同じく、人間が「私」という意識を有することを前提としている。とはいえこの意識は、『純粹理性批判』が用意する「アプリアリ a priori」と呼ばれた次元（＝経験に先立つ次元）において論じられるのではなく、経験領域に現れるその姿において捕捉され、事例として提示されるのである。

人間学に固有の記述方法とは、端的に言えば、人間を経験領域において記述することに他ならない。カントは同書のなかで度々、人間学では形而上学的な考察を行わないと述べている。エゴイズムが問題となる場面でも、ブルーリズムとの対比を念頭に置いて、「形而上学の概念に基づいたこの区別と関わるものは、ここで扱われる領域からは完全な外部にある」[Kant 1917: 130]と語られている。人間学では、エゴイズムやブルーリズムが形而上学においてどのように説明されうるか、ということは重要ではない。人間は世界全体の単なる部分にすぎないにも関わらず、「自分自身のなかに世界全体を包み込んでいる」[Kant 1917: 130]ように思い込んでしまう。「私」という意識に起因するこの錯覚ゆえに、人間が様々なエゴイストとして振る舞ってしまうその姿こそ、人間学で記述されるものなのである<sup>(4)</sup>。

ところで、カントの思想に通じている者であれば、人間学の記述方法を前にすると困惑するだろう。というのも、カントは『純粹理性批判』をはじめとする諸学問では、形而上学者としての立場を重視してきたからである。カントのこうした立場に鑑みると、人間学で記述される人間のあり方が、経験領域において現れるその姿であることは、同じ人物の手によるものとは一見すると思われない。さしあたり、これはひとつの印象にすぎない。けれどもそうした印象が、論者たちを困惑させてきたことは事実である。ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) はまさにそのひとりである。ゲーテは同書の感想を、次のように記していた。「カントの人間学は私にとって非常に貴重な著作であるが、全体としては快いものではないため、私はそれをよりわずかな分量で繰り返し楽しむなら、将来的にはさらに貴重なものとなるだろう。こうした観点からすると、人間はつねに病的な状態であるように見える」[Goethe 1988: 362]。

「人間はつねに病的な状態であるように見える」というゲーテの言葉を真剣に受け取るか否かは別

としても、人間学で記述される人間のあり方が、カントが取り組んだ他の諸学問と比べると、明らかに異なる様相を呈していることは確かである。カントに対する理解を問題にする本研究にとって、このことは、極めて注目に値する事実である。ではなぜ、カントはこの学問で、人間を経験領域において記述することを試みたのだろうか。そこには、カントのいかなる洞察があったのだろうか。

### 3. 「ひとりの人間」に対する眼差し

ニュートン (Isaac Newton) の影響下で思索活動を開始したカントは、1760年代より人間の探求に関心を抱くようになる。人間学講義の開講時期は、その延長線上に位置を占める1772年の冬学期にあたる。カントがこの頃、人間学をどのような学問として構想していたのかについては、同時期のテキストから窺うことができる。最後となる本章では、それらのテキストを手がかりとして、人間学に込められたカントの意図を探ることにしたい。私たちはこの作業を通して、カントが人間学に取り組むにあたり重視していた、人間の探求と関わる洞察を明らかにする。

カントは人間学講義を開講した翌年、友人に宛てた書簡のなかで、プラトナー (Ernst Platner) が出版した『医者と哲学者のための人間学』(1772) に触れて、「私の計画は他のものとは完全に異なる」と述べていた。カントはこのことを伝えて、続けて以下のように述べている。

私の意図は、人間学によって (…) 実践的なもの全ての源泉を開示することにある。私はその際、人間の自然本性一般が様々に変容する可能性の第一根拠よりも、現象及びその法則を探求する。したがって、身体諸器官はどのように思考と結びついているのかという些末な、私からすると永遠に不毛な探求は決して行わない [Kant 1922: 145]。

人間学は「実践的なもの全て alles Praktischen」を対象とする。実践的とはこの場合、『実践理性批判』(1788) で論じられるような、義務に基づく実践と関わるものではなく、人々の日常における実践と関わるものである。だからこそ、人間学では「人間の自然本性一般が様々に変容する可能性の第一根拠」ではなく「現象及びその法則」を探求することが課題となる。

カントがこのように、人間学が立脚する次元を「現象 Phänomena」(及びその「法則 Gesetz」) に定めていることは<sup>(5)</sup>、彼が当初からこの学問で、人間を経験領域において記述しようと計画していたことを表している。人間を探求するということは、現象の奥底に潜むような本質を解明することではなく、現象のなかに浮かび上がるその姿を探求することでなければならない。したがって、人間学では「観察 Beobachtung」が主要な方法論として採用されることになる。「私は日常生活でさえ観察からつねに離れないようにしている。私の聴講者はそれゆえ、最初から最後に至るまで、決して無味乾燥なことには取り組まず、慣れ親しんだ自らの経験を私の意見と絶えず比較する機会を持ち、楽しい作業をいつも行うことになるのである」 [Kant 1922: 145-146]。

では、人間学を経験領域に対するこの関心は、何に由来するのだろうか。カントがこの点を明確

に論じているのは、人間学講義の開講から3年後に出版された、「さまざまな人種について」(1775)という論文である。自然地理学講義の告知を目的とした同論文では、自然地理学の位置づけに加え、人間学の位置づけも併せて説明されている。なぜなら、両者は「世界知 Weltkenntniß」を探求することを共に目指した学問として、相互に関わりを持つからである。カントによれば、世界に関する知識には、人間を対象とする知識と、自然を対象とする知識がある。人間学は前者を探求し、自然地理学は後者を探求する<sup>(6)</sup>。

カントは同論文の終盤にあたる箇所、人間学講義(及び自然地理学講義)が、「世界知における予行演習と呼ぶことが許される有用な大学の講義」であることを、以下のように説明している。

私がこれによって告知する自然地理学は、世界知における予行演習と呼ぶことが許される有用な大学の講義に関して、私が考えている理念に属している。この世界知は、他に獲得されている学問と熟練の全てに実用的なものを与えるのに役立つ。それによって学問と熟練は学校に役立つのみならず、人生にも役立ち、学業を修めた学生はそれを通して自らの使命の舞台である世界に導き入れられる。ここで彼の前には、将来のあらゆる経験をそこで規則に即して秩序づけることができるようにするために、事前に概略を必要とする2つの領域として自然と人間がある。この両者はしかし、そこでは宇宙論的に熟考されなければならない。つまり、これらの対象が含んでいる個別の特徴(自然学と経験的心理学)ではなく、対象が存しておりまたその各々が自らの位置をそこで占めるような全体における関係を、我々に気づかせてくれるものに従って熟考されなければならない。私は前者の教授を自然地理学と名付け、夏学期の講義にすることに決め、後者の教授を人間学と名付け、冬学期に残しておく[Kant 1905: 443]。

人間学(及び自然地理学)が探求する世界知とは、学問領域に閉ざされた理論的な知識ではなく、「人生 Leben」に役立つような実用的な知識である。世界知が人生に役立つと言われるのは、この知識が、世界を巧みに渡り歩いていくための処世術だからではない。それは何より、世界を「概略 Abriß」として示すものだからである。人間学においてこのことは具体的に、世界で各々の位置を占めながら生きる人々を、「全体 das Ganze」という視点から記述することを意味する。カントが「宇宙論的 kosmologisch」と表現しているのは、このようなことである。人間学において、人間はその「特徴 Merkwürdige」に即して探求されるのではなく、「全体における関係 Verhältniß im Ganzen」のなかで探求されなければならない。全体とはこの場合、「我々があらゆる経験を得ることになる舞台」であると同時に「人間を知ることが我々に教えてくれる知識の総体」であるような、世界を指している<sup>(7)</sup>。人間学はまさにこの世界に自らの視点を基づけ、人々がそこで披露する諸側面を記述することによって、世界に参入することになる者が「将来のあらゆる経験をそこで規則に即して秩序づけることができるようにする」のである。

カントは当初から、学問は「学派のため」に終始するならば、「その知識は世界の人々の役に立つことはない」と考えていた。カントは1780年代の講義録で、研究上の第1の方式にあたるこの「学



派のための学問」から区別して、「研究上の第2の方式とは、ある人が学派仲間の内で名声を得るばかりではなく、学派を超えてその知識を広めて、自分の持つ知識を広く一般の人々も利用することができるようにすることである」[Kant 1997: 853]と述べている。人間学はこの研究上の方式に基づいて、講義の実施段階では学生のために、著作の出版段階では読者のために、人々が日常生活を営むところの世界を、その実体に即して描き出そうとした。人間学の経験領域に対する関心は、世界をそれが現れる姿として捉えることにおいて、「世界知における予行演習」を提供するという企図に根差している。

だからこそ、人間学においては、人間に関する特定の定義が問題となることはない。カントにおいてそれはまさに、人間とは理性的存在者であるという定義が、問題とはならないことを意味する。カントは同講義録で、その旨を以下のように表していた。

人間一般を認識しなければならないとなると、人間を認識することは言うまでもなく困難である。私は人間を認識しようとしたとしても、人間を他の何かと比較することができないからである。自分自身を他人とは区別されたものとして知ることであれば、他人と比較することによって自分をより正確に知ることができる。ところが私は人間とは何かを問うとき、人間を動物と比較することはできない。いかなる動物も決して人間に対して優位に立つことはないし、そして我々は人間以外に理性的存在者を知らないからである。人間一般に関する認識を得ることは困難であり、ひとりの人間に関する特殊な認識を得ることの方が容易である [Kant 1997: 859]。

本研究にとって最も重要なこの引用を、カントの言葉を補いながら丁寧に読み解こう。人間学において「人間とは何かを問う」とはいかなることか。カントはこのことを、どのように説明しているのだろうか。

カントによれば、「人間一般 Menschen überhaupt」を認識することは、「人間とは何かを問う」には不十分となる。というのも、人間一般を認識するためには、人間を他の何かと比較しなければならないが、そこから得られる認識は、この比較から知りうるものに限られるからである。人間とは理性的存在者であるという定義も、結局のところ、人間を動物と比較することによって得られる認識でしかない。もちろん、カントは人間一般を認識すること自体を否定しているわけではない。けれども、人々が日常生活において披露する諸側面を捉えようとするこの学問においては、「人間一般を認識しなければならないとなると、人間を認識することは言うまでもなく困難である」というわけである。

カントはこうした困難を自覚するからこそ、人間を「一般」として捉える視点を括弧に入れて、「ひとりの人間 ein Mensch」に視点を基づけようとする。カントにおいてそれは、「他人と比較することによって自分をより正確に知ること」を意味する。他の何かとの比較において人間一般を知るよりも、「他人」との比較において「私」を知ることが、人間学者としては重要なのである。もちろんここで、「私」を知るためには何よりもまず、その比較対象となる「他人」を知ることが必要とな

るだろう。そうであるならば、カントがここで念頭に置いているのは、「私」という極点から「人間」を知り尽くすことではなく、「他人」との比較において現れる「私」を知ることを通して、「人間」のあいだに存する差異に目を向けることであると言える。カントは別の箇所でもまさに次のように述べている。「人間を認識するためには、人間の多様性や特徴に関して十分な示唆が与えられなければならない。人間の多様性や特徴は極めて重要であり、そのいずれもが人間を認識することに先行し、それによって経験が拡張されなければならない」[Kant 1997: 854-855]。カントのこの言葉からも明らかであるように、人間学者として「人間とは何かを問う」とは、人間がこの世界において多様に生きているという事実を、「私」を起点として知ることなのである。

人間を「人間一般」ではなく「ひとりの人間」として捉える眼差しが、20余年にもわたる人間学の取り組みのなかで、日常生活を生きる人々を捉えてきたことの意味は、決して看過しえないだろう。私たちが三批判書をはじめとする主要著作に注目するあまり、「ひとりの人間」に対するこの眼差しを背景に退けてきたとするなら、カントに対する理解は、根底から問い直されるべきではないだろうか。もちろんこのことは、カントがもっぱら、人間の多様な生き方を探求することに専念した人物であった、と主張するものではない。カントが主要著作においては、「人間一般」を前提として理論構築に取り組んでいたことは、それ自体として事実である。とはいえ、カントが形而上学者としての側面によっては汲み尽くしえないこと、人間学者としての側面がその背後で脈を打っていることを、私たちは忘れないでおきたいのである。

## おわりに

本研究では、人間学と関わるテキストの読解を通して、カントの人間学者としての側面を明らかにしてきた。人間を経験領域において記述することを試みるこの学問は、カントが取り組んだ他の諸学問と比べると、明らかに異なる様相を呈している。とはいえここには、講義の実施段階では学生のために、著作の出版段階では読者のために、人々が日常世界を営むところの世界を、その実体に即して描き出そうとする企図があった。カントが「実用的」である人間学に拘り続けたという事実は、「世界知における予行演習」を提供するというまさにこの企図に由来する。カントにおいてはここから、人間を「人間一般」ではなく「ひとりの人間」として捉える眼差しが、世界に向けられることになる。人間を「一般」として捉える視点を括弧に入れて、人間がこの世界において多様に生きているという事実を、「私」を起点として知ろうとする姿勢こそ、カントがこの学問に取り組むにあたり重視していたものであった。

本研究において示されたのは、人間の多様な生き方を探求していたカントの姿に他ならない。カントはたしかにある側面では、人間とは理性的存在者であるという定義を、自らの理論構築において前提としていた。ビースタが指摘する通り、教育を論じる場面でもこのことは例外ではない。カントの教育理論ではたしかに、「人間であるとは何を意味するのかについての基準」が「理性使用に基づく自律」に定められていた[Biesta 2010: *ibid.*]。とはいえここで、「人間であるとは何を意味す

るのかについての基準」を定める姿勢は、カントに対する理解としてはひとつの側面にすぎないことを、私たちが把握しておくことは重要である。それは何より、近代教育批判が定着してきている今日、カントに対する理解をその「近代的」な側面に還元しないようにするためであり、あるいはまた、「近代的」な側面とは異なる着眼点からその思想を再考する可能性を保持しておくためである。

本研究はこの意味で、カントのテキスト読解に関する到達点であるよりむしろ出発点である。カントが「ひとり人間」に対する眼差しを有していたことが、教育を論じる場面も含めて、諸学問に取り組むときにも何らかの意味を持ちうるとするなら、私たちはこの視点から今一度、カントのテキストを見直してみる必要があるだろう。それはいわば、カントというまさにこの人物を「ひとり人間」として捉える視点から、テキストに臨むということを意味する。カントもまた私たちと同じく、人々が日常生活を営むところの世界に身を置きながら、彼なりにその世界を意味づけようとした「ひとり人間」であった。カントをそのような人物として捉え直すとき、形而上学者の手によるものと見なされてきた彼のテキストは、新たな装いのもとに現れてくるのではないだろうか。

#### <注>

- (1) 教育学のこうした潮流に関して、ヴルフ (Christoph Wulf) に代表される教育人間学が果たした役割は大きいと言える。ヴルフは『教育人間学入門』(1994)の序文で、「大きな物語」が終焉を迎えた状況を積極的に捉えて、次のように述べていた。「それどころか、人間学の研究方法はむしろ、新たな教育科学の問題設定、観点、主題、知識連関を生み出すことができる。閉鎖的な人間学の体系と全体的な解釈の時代が過ぎ去った今日では、多元的な人間学の知を生み出すことのみが可能である」[Wulf 1994: 14]。国内の教育人間学においても、多数の論者によって、人間形成の多面的な側面を解説する試みがなされてきている [西平 1997] [矢野 2000] [高橋 2007]。
- (2) 矢野智司もまたこの種の暴力を、「人間が動物を支配するという非対称の関係」に着目して論じている。つまり、人間の固有の特質を動物との対比から示そうとする思考においては、「人間が動物を支配するという非対称の関係」が成立し、そしてこの関係が「動物たちのみならず「動物」と呼ばれた人たち(「子ども」「女性」「ユダヤ人」「黒人」「障害者」「貧民」「移民」「難民」「未開人」「野蛮人」……このリストはどこまでもつづく)への暴力を呼びこみ、その暴力を正当化する」ことになるのである [矢野 2019: 138]。矢野においてもこの場合、カントの思想にひとつの淵源が見出されている。カントが人間と動物の対比を軸に教育を論じたことに触れて、矢野は次のように述べている。「教育の語りは動物との対比からはじまり、人間の固有の特質が示され、教育の必要性が述べられる。近代教育学のテキストは、こうしたカントの論述を主題とした多様な変奏曲として理解することができるだろう」[矢野 2019: 125]。
- (3) カント研究では支配的とも言えるこの解釈の他に、カントは2つの人間学を重視していたとする解釈や [小熊 1992: 187-188]、カントは実際に取り組んだ人間学を重視していたとする

解釈がある[坂部 1976: 53-54]。近年では、人間学の位置づけを特定する作業を脇に置いて、カントが実際に取り組んだ人間学を、それ自体として評価しようとする動向も見られる。ジェイコブス (Brian Jacobs) /カイン (Patrick Kain) が編集した『カントの人間学に関する試論』(2003) では、カント研究者が各々の立場から、人間学と他の諸学問との関連性を吟味したり、各主題に関する情報源を人間学に求めたりしている [Jacobs & Kain (ed.) 2003]。国内では弘田陽介によって、「手ざわり」という巧みな表現を用いて、カントが実際に取り組んだ人間学の特徴を捉える試みがなされている [弘田 2007: 167-191]。

- (4) 本研究では、「エゴイズム Egoismus」が問題となる場面に即して、人間学が経験領域に立脚していることを確認しているが、人間学のこの側面は他のあらゆる考察にも通じている。例えば「認識能力 Erkenntnisvermögen」(感性・悟性・理性) が問題となる場面でも、定義に即したそのあり方ではなく、現にそれが使用されるそのあり方が論じられている。フーコー (Michel Foucault) はこの点を捉えて、次のように述べている。『『人間学』は『批判』と同じような「能力」の区分に従っている。けれどもそこで特権的となるのは、能力が積極的な側面を見せる領域ではなく、むしろその失調が、あるいは少なくとも、迷いの危険が立ち現れる領域である。『人間学』が示すのは、諸能力がその中心と正当な根拠から遠ざかり、非正統的なもののなかに疎外され、自らを失うような運動である」 [Foucault 2009: 43]。
- (5) カントはこの書簡では「法則 Gesetz」という語を用いているが、講義のなかでは「規則 Regeln」という語を好んで用いている。規則とはこの場合、人間たちの振舞いに制約を課すものではなく、人間たちの振舞いに見出されるある種の傾向を指している。カントは1780年代の講義録で次のように述べている。「我々がここで意図しているのは、人間について我々が知覚する多様なものから規則を引き出すことだけである。人間の気分は限りなく多様であるように見えても、そこには考えられる以上の規則正しさがある。人間の振舞いのこうした戯れを、我々は規則のもとにもたらすのである」 [Kant 1997: 856]。
- (6) カントは『実用的見地における人間学』を出版するにあたり、同書の序文でも、人間学と自然地理学の関連を次のように記している。「最初は自由に引き受け、後に職務として私に託された純粹哲学の仕事の中で、私は30年以上にわたって世界知を目的とする2つの講義、人間学(冬学期)と自然地理学(夏学期)を担当してきたが、両者は大衆的な講演として他の身分の人々も出席することが望ましいと考えた」 [Kant 1917: 122]。自然地理学とは、地球上の様々な自然的対象を記述する学問であり、その成果がまとめられた『自然地理学』(1802)の構成に即して言えば、「地球上に分布するものに関する個別的な考察」として「人間」(とりわけ「人種」)・「動物界」・「植物界」・「鉱物界」の在りようが記述され、「世界各地の自然的特徴に関する地理学的な総括」として「アジア」・「アフリカ」・「ヨーロッパ」・「アメリカ」の特徴が記述されている。
- (7) カントは「全体における関係」と表現する場合の「全体 das Ganze」について、『自然地理学』(1802)で次のように述べている。「この全体とはここでは世界であり、我々があらゆる経験

を得ることになる舞台である。人との交際や旅行によって、我々の知識全体の範囲は拡張される。我々はこうした交際によって人間を知るのだが、この究極目的を達成しようとするには多くの時間が必要となる。我々はしかし、指導によって事前に準備するなら、我々は全体を、すなわち人間を知ることを教えてくる知識の総体をあらかじめ持つのである」[Kant 1923b: 158]。

### <参考文献>

- 小熊勢記 (1992) 『カントの批判哲学——認識と行為』、京都女子大学。
- 高坂正顕 (1964) 『高坂正顕著作集』、第2巻、理想社。
- 坂部恵 (1976) 『理性の不安——カント哲学の生成と構造』、勁草書房。
- 高橋勝 (2007) 『経験のメタモルフォーゼ——〈自己変成〉の教育人間学』、勁草書房。
- 西平直 (1997) 『魂のライフサイクル——ユング・ウィルバー・シュタイナー』、東京大学出版会。
- 弘田陽介 (2007) 『近代の擬態／擬態の近代——カントというテキスト・身体・人間』、東京大学出版会。
- 矢野智司 (2000) 『自己変容という物語——生成・贈与・教育』、金子書房。
- 矢野智司 (2019) 『歓待と戦争の教育学——国民教育と世界市民の形成』、東京大学出版会。
- Biesta, Gert J. J.. (2010) *Good Education in an Age of Measurement*, Routledge. (藤井啓之・玉木博章訳、『よい教育とは何か——倫理・政治・民主主義』、白澤社、2016年)
- Brandt, Reinhard. (1999) *Kritischer Kommentar zu Kants Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*, Felix Meyner.
- Foucault, Michel. (2009) "Introduction À L'anthropologie De Kant," in *Anthropologie D'un Point De Vue Pragmatique précédé de Introduction À L'anthropologie*, Librairie Philosophique J. Vrin. (王寺賢太訳、『カントの人間学』、新潮社、2012年)
- Goethe, Johann Wolfgang von. (1988) *Goethes Briefe*, Bd. 2. 1786-1805, herausgegeben von Karl Robert Mandelkow, C. H. Beck.
- Heidegger, Martin. (1965) *Kant und Das Problem der Metaphysik*, Vittorio Klosterman. (木場深定訳、『カントと形而上学の問題』、理想社、1967年)
- Hinske, Norbert. (1980) *Kant als Herausforderung an die Gegenwart*, Verlag Karl Alber. (石川文康 (他)訳、『現代に挑むカント』、晃洋書房、1985年)
- Jacobs, Brian / Kain, Patric (ed.). (2003) *Essays on Kant's Anthropologie*, Cambridge University Press.
- Kant, Immanuel. (1905) "Von den verschiedenen Rassen der Menschen," in *Kant's Gesammelte Schriften*, Bd. II, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Walter de Gruyter, S. 427-444.
- Kant, Immanuel. (1911) "Kritik der reinen Vernunft," in *Kant's Gesammelte Schriften*, Bd. III, herausgege-



- ben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Walter de Gruyter, S. 1-552.
- Kant, Immanuel. (1917) "Anthropologie in pragmatischer Hinsicht," in *Kant's Gesammelte Schriften*, Bd. VII, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Walter de Gruyter, S. 117-333.
- Kant, Immanuel. (1922) "Kant's Briefwechsel," in *Kant's Gesammelte Schriften*, Bd. X, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Walter de Gruyter, S. 1-159.
- Kant, Immanuel. (1923a) "Immanuel Kant's Logik: Ein Handbuch zu Vorlesungen. Herausgegeben von Gottlob Benjamin Jäsche," in *Kant's Gesammelte Schriften*, Bd. IX, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Walter de Gruyter, S. 1-150.
- Kant, Immanuel. (1923b) "Immanuel Kants physische Geographie, Auf Verlangen des Verfassers aus seiner Handchrift Herausgegeben und zum Theil bearbeitet von D. Friedrich Theodor Rink," in *Kant's Gesammelte Schriften*, Bd. IX, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Walter de Gruyter, S. 151-436.
- Kant, Immanuel. (1923c) "Kant's handschriftlicher Nachlaß. Anthropologie," in *Kant's Gesammelte Schriften*, Bd. XV, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Walter de Gruyter, S. 55-493.
- Kant, Immanuel. (1997) "Die Vorlesung des Wintersemesters 1781/82 [?] aufgrund der Nachschriften Menschenkunde, Petersburg," in *Kant's Gesammelte Schriften*, Bd. XXV. 2, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Walter de Gruyter, S. 853-1202.
- Wulf, Christoph. (1994) "Zur Einleitung: Grundzüge einer historisch-pädagogischen Anthropologie," in *Einführung in die Pädagogische Anthropologie*, herausgegeben von Christoph Wulf, Beltz grüne Reihe, S. 7-21. (高橋勝監訳、「歴史的教育人間学の基礎」、『教育人間学入門』、玉川大学出版部、2001年、5-20頁)

**Kant as an Anthropologist:  
Reconsideration of the Critique of Modern Education**

**Keisei TSUKANO**

We have focused on Kant's view of human beings as the rationale of exclusion of particular people in the context of the critique of modern education. For example, Gert J. J. Biesta points out that Kant set a norm of "what it means to be human" in "autonomy based upon the use of reason" and excluded people who do not live up to this norm. It is true that this opinion is correct and important, but we need to confirm the profundity of Kant's thought, in order not to restrict our understanding of Kant to 'modern' aspects. He set a norm of "what it means to be human" in "autonomy based upon the use of reason," but on the other hand, researched on people's diverse ways of living.

In this paper, focusing on Kant's anthropology, I evaluate Kant as an anthropologist and try to change our conventional understanding of Kant. His anthropology, which described human beings in the realm of experience, looks distinctly different from other disciplines he worked on. For this reason, his anthropology has not been properly evaluated or has been given several negative evaluations. But his way of describing human beings in the realm of experience represents his deep insight into human beings. He tried to depict the real world where people live their daily lives, in order that people could understand the world better. So his perspective of seeing human beings as individuals was directed toward the world. He emphasized the importance of paying attention to the fact that human beings live in various ways.

This study is just a starting point for reading of Kant's works. Taking into consideration the possibility that his perspective of seeing human beings as individuals were included in other disciplines he worked on, we need to review his works. This means that we need to read his works seeing him as a person. Kant was a person, like us, who lived his daily life and made sense of the world in his own way. When we see him as such a person, his works have a new look which is not restricted to 'modern' aspects.